

「明 暗」の 帰 結 に つ い て

— 一つの推定 —

福 田 金 光

On the End of “Meian”

Kanemitsu FUKUTA

I は じ め に

1. 村上嘉隆氏はその著「夏目漱石論考」のあとがきに「沢山の研究書にふれてつくづく感じたことは、同一対象の漱石が、よくも人によってそれぞれ異なる姿に解釈されうるものだというのであった。漱石の多面性に驚くより先に人様さまという事実¹に驚いてしまった。盲人の象さぐりとも考えてみたが、結局各人が人生に生きる生きがいが様さまであって当然と思った。(下略)」と記している。

人様さまもさることながら、盲人の象さぐりとは言い得て妙で、漱石の作品の研究には、論者の恣意の先だつものが少なくない。漱石の多面性が原因であるばかりでなく、研究の方法や順序が確立されていないことが大きな理由の一つと考えられる。

日本の近代文学の最高峰、またはそれに近い作品であると多くの研究者が評価する「明暗」に限っていえば、その感²は更に深く、鑑賞や批評のためには不可欠の未完の部分の帰結の推定も、百家争鳴で、方向づけさえ定まらないのである。

2. 「明暗」という題名、本文、構想やテーマを記したかと思われる大正5年初夏頃の「断片」、8月の久米・芥川宛の手紙、午後の日課とした漢詩、良寛の書への傾倒、禅僧鬼村元成たちへの手紙、11月の木曜会で説いたという「則天去私」の話、執筆時以前の「断片」や手紙、過去の諸作品との関連、外国文学諸作品の影響、創作方法、論者の文学論や心理学、漱石の文学論、原体験その他枚挙しきれない資料が考えられるが、研究者としては、何よりも先に「本文」の熟読検討こそが必要で、次いで構想やテーマを記したかと思われる大正5年初夏頃の「断片」の解明を試みるべきではなかろうか。

3. もっとも、作品論的立場ばかりでなく、作家論の見地も、漱石のように、いわゆる男女の三角関係(女1人を男2人で争う)を金銭関係とともに、多くの作品で執拗にその主たる素材として追求した作家に対しては、重視せざるを得ないことである。「明暗」の帰結の推定についても、彼の原体験³の追求は無用ではないであろう。江藤淳氏は、漱石の英詩“Dawn of Creation”に暗示されているものは、嫂登世との秘密の恋であるとし、小坂晋氏は「漱石の愛と文学」に多くの資料を挙げて、親友大塚保治の夫人楠緒子を彼の一生の想い人とする。どちらも絶対タブーの恋愛で、律気で shy な漱石としては、自然主義作家のように剥皮の告白をしえないことである。「明暗」の「清子」は全編を貫いて津田を心理的に支配し、帰結の推定の鍵は彼女が握っているといつてよい。然り而して、登世と楠緒子は既に故人であるが、兄の和三郎も親友の保治も、明暗執筆時には身近に生活していた。告白するにしても原型を留めぬほどの変形を必要とする。

4. また、創作方法の検討も無視できないことで、唐木順三氏は「⁸明暗論」のまえがきに『道草』までは一直線に進んでいて、整合的に扱える。というのは漱石内部のイデオロギが主題となって作品そのものを引っばっているからである。ところが「明暗」にいたると、作者がそこで何を言おうとしているのか、どういう問題に苦しんでいるのかが表面に出ていない。それは未完に終わったということばかりからくるのではない。創作方法の相違からくるのである。」とし、久米・芥川宛の手紙の中の「尋仙未向碧山行 住在人間足道情、明暗双双三万字 撫摩石印自由成」を引いて、「自由成は漱石が弁解しているように、手前味噌でも、成行上己むをえない自負でもなかった。それは『明暗』の全構成が示しているところである。」と述べ、「作者は医者立場から津田自身の中へ降りる。作者自身の暗→明という往相から、明→暗という還相へ出てくる。漱石は還相のところまで行っていた」そこで「明暗」は従来の作品と異なり心機一転して、『百尺の竿頭をのぼりつめて脱落し、これが浮世のさまなれやといふところがそこにある』ということになる」というのである。この見地から「清子」を考えると、彼女は「清子には技巧がないだけに事実が事実写真に写り、利害の念がないだけにそれを率直に言葉にする」無私の女となる。この考え方は今も根づよく多くの研究者に基調として支持されている。

5. そのような無私の女性が現実により得るか、また作品中に水と油のような脱人間的人物が出現しては近代文学ではなくなってしまう。したがって、「明暗」の登場人物はすべて、その性格に内在する心理の相対によって生ずる法則のもとに言動をしなければならない、とする論者も、戦後には特に多い。

Ⅱ 帰結に関する諸家の説とその考察

帰結についておよそ理論的に大別して考え得ることは、1. 推定は不可能である。2. お延が自殺する。3. 津田が死ぬ。4. 清子が死ぬ。5. だれも死なない。などということであろう。そしてそのいずれものケースが、諸家によって提示されている。以下そのおもなものを述べ、かつ考察を加える。

1. 猪野謙二氏は「この小説が如何なる結末を告げるであろうかという問に対する、あらゆる解答をわたくしは信用しない。『おそらく作者にすらそれはわからなかったろう』というただ一つのそれを除いて」という。

氏がすべての推定を拒否するのは、漱石の講演「現代日本の開化」で彼のいう「人間活力」や、大正3年1月の畔柳芥舟宛の書簡中にある「僕のはいつでも自分の心理解剖であります」などを基とし、「津田」の自由意志に対立する「暗い不可思議な力」により、自分の意志のままに行動し、語りつつ、しかも予期しない結末が突然あらわれる」と考えるからである。

書き終ってしまわなければ、作者にも結末はわからない、とは、厳密に言えば未完の作品はすべてその通り、ということになる。しかし「明暗」はその大筋さえも推定を許されないほど進行していない作品とは思われないし、少なくとも既述の部分から、ある程度の推定は可能である。

2. お延が死ぬ。とするのは、古くは⁵滝沢克己、⁶中村草田男ら、近くは⁷小坂晋その他の諸氏で、論拠は多様であるが、その中核には「明暗」87節の小林とお延の対話「奥さん、人間はいくら変な着物を着て人から笑われても、生きている方がいいものなんですよ」「そうですか」お延は急に口もとを締めた。「奥さんのような困ったことのない方にゃ、まだその意味がわからないでしょうがね」「そうですか。私はまた生きてて人に笑われるくらいなら、いっそ死ん

でしまったほうがいいと思います」や、154節の津田との対話「本当よ。なんだか知らないけれども、あたししじゅうそう思ってるの、いつか一度このおなかの中にもっている勇気を外へ出さなくっちゃならない日が来るにちがいないって」「いつか一度？ だからお前のは妄想と同じことなんだよ」「いいえ生涯のうちでいつか一度じゃないのよ。近いうちの。もう少ししたらのいつか一度なの」(下略)が考えられる。

しかし仮りに、温泉場に行って津田の裏切りを見たとしても、絶望して死ぬようなお延ではなさそうである。自我に基づいて夫を占有しようとして出す彼女の勇気が、打ちのめされた場合、狂乱するとか、夫を見そこなった悔恨にさいなまれるとかいうようなことはあっても、自殺するようなことはまずない。見栄や体裁のために、また自ら選んだ夫であるが故に、「愛して愛させる」と従妹の継子の前で断言するお延ではあるが、彼女には既にいざという場合の帰還の場所が作者によって周到に用意されている。62節の叔父との対話の中に「おれの言ったとおりじゃないかね。なければ仕合わせだ。しかし万一になにかあるなら、また今ないにしたところで、これから先ひょっと出て来たなら遠慮なくうち明けなけりゃいけないよ」お延は叔父の眼の中に、こうした慈愛の言葉さえ読んだ」とある。更に73節では、百合子との対話で「百合子さん、あたしまたおじゃまに上がりましたよ。よくって」(中略)「いいわ、来ても。追い出されたんでなければ」「まあひどいこと」(中略)「百合子さん、もしあたしが津田に追い出されたら、少しは可哀そうだと思ってくださるでしょう」「ええ、そりゃ可哀そうだと思ってあげてもいいわ」「そんならその時はまたこのお部屋へ置いてくださって」。直感にすぐれたお延と、子どもの純真さをもつ百合子とが、近い将来を予言するかのように、さりげない対話を交わしている。性格からも設定からもお延は死ねない。

3. 津田が死ぬ。とするのは江藤淳氏らである。

「津田は清子によって救われようとして湯治場に出かける。が彼は『平生の彼に似合わない遣口』で『医者』に相談して転地を禁じられでもすると、却って神経を悩ますだけが損だと打算し』て軽率にも再発の危険を冒して出かけるのである。彼は清子に逢うが(そこまで『明暗』は中絶されている)救済されるどころか、したたかに攻撃され——あたかもお秀にそうされたように——宿痾を再発して死ぬ」というのである。

しかし、176節の廊下で図らずも清子に津田が出会う場面では、「同じ作用がそれ以上強烈に清子をその場に抑えつけたらしかった。階上の板の間まで来てそこでびたりと止まった時の彼女は、津田にとって一種の絵であった。彼は忘れることのできない印象の一つとしてそれをのちのちまで自分の心に伝えた」とある。「のちのちまで自分の心に伝えた」とあるからには、津田はのちのちまで死なないはずである。

また、宿痾を再発して大病となるにしても、153節の「これが癒りそくなったらどうなるんでしょう」という津田の問いに対する「また切るんです。そうして前よりも軽く穴が残るんです」という小林医師の返答が暗示するように、(また漱石自身修善寺の大患で九死に一生を拾ったように)死なないであろう。

4. 清子が死ぬのではないか。というのは小島信夫氏で、大正5年の漱石の「日記及び断片」の「二人して一人の女を思う。一人は消極 sad, noble, shy religious, 一人は active, social 後者遂に女を得。前者女を得られて急に淋しさを感じる。居たたまれなくなる。lifeの meaning を疑う。遂に女を口説く。女(実は其人をひそかに愛している事を発見して戦慄しながら)時期遅れたるを諭す。男聴かず。生活の本当の意義を論ず。女は姦通か。自殺

か。男を排斥するかの三方法を有つ。女自殺すると仮定す。男惘然として自殺せんとして能わず。僧になる。又還俗す。或所で彼女の夫と会す」を引用して、これを「これからかかる明暗の筋というのは大胆すぎるが漱石好みの筋であることはまず間違いない」とし、「実はその人をひそかに愛していることを発見しながら」について、「清子と不意に顔を合わせると彼女はおびえる。思いがけず津田に出会うのだからおびえるのは当然だが、彼女がおびえたのは、そのせいではなさそうだ。何故なら、そうでなければ殆んど小説家が小説を書く意味などはないから」と述べ、「断片」の筋書が実作中でも進行していきそうな見解をとっている。

小島信夫氏の所論は客観的な資料である「断片」を作家的感覚で捉えており、「明暗」の本文のどこにもこれを否定せねばならない記述はない。

5. だれも死なない場合

(1) 未解決説は桶谷秀昭氏である。氏は「死も救済も、髪一筋のところまで津田を追いつめなければ、所詮教訓小説の説教に終わるしかない。そして確実にいえることは、津田を追いつめるのは津田自身の弁証であって、清子ではないということである。清子は津田の弁証を果て迄ひっぱっていき、彼女自身は無意識の牽引力である。書き残された部分で、漱石はどんな運びを予定していたか、論者はだいたい一致して、温泉宿に、やがて清子の夫がやって来、延、秀、吉川夫人、さらに小林があらわれ、第一のやまである病院の場面に匹敵する第二のやまが出現するだろうと予想している。それは明暗の破局になるはずのものである。おそらく漱石もそれを予定していたかもしれない。そうすると、未完の作品の最後は、第二のやまの序の口にすぎないことになる。しかし明暗の破局はずっとはやくやってくるのではないか、という感じがする。湯河原の舞台での描写の転調には、何か作者のこころ急ぐ息遣いが、かすかではあるが聞こえてくる」と述べ、「作者は第一のやまのように悠々と——そういうと語弊があるが——作中人物を動かすことはできなくなっている。そうではないか、清子を出してきたことは清子以外の他の人物、当面は津田だが、彼と作者との関係の水位を一段と高めることを作者は強いる。そうしなければ清子はつまらぬ観念のカイライになってしまう」と論じ「この第一のやまと第二のやまの落差は『罪と罰』と『白痴』の間によこたわるほどのものになるであろう」から、「結局漱石は第二のやまを別の物語として予告して、明暗を閉じることになったのではないか」と結論するのである。

どういきりかけで、どういう順に、だれだれが温泉場に来るかは不明であるが、温泉場で清子や津田に関して何事かが起こり、あるいは起こらなくても、二人の滞在中に関係者特にお延は姿を現わすものとする論者は多い。しかし、清子を出現させたことにより、作者と清子との水位が高くなったから、それで打ち切りになると速断するのは、いかがなものであろうか。身体の変調を予感した漱石が牛を馬に乗りかえたとするのはまだよい。帰結の部分を書ききる用意不十分とするのは根拠に乏しい。当否は別として則天去私的解決もあるいはあったかも知れないし、こころ急いだのは、熟した解決からの引力であるかも知れない。漱石はいい時に死んだ、とばかりは断言できないであろう。

(2) 百鬼和合説。小宮豊隆が「百鬼夜行之図」と評したのをもじって「百鬼和合」をいうのは村上嘉隆氏である。

氏の予想の第一点は、「津田は、清子の『微笑』の前に技巧を喪失して、『子供子供』した『何故』だけを繰返すようになると思う。ところが『子供じみ』た『微笑』の主は冷厳にこの津田を一蹴する。まつわりつく子供はめいわくという清子の断は、津田の聞きたかった理由を

態度で示すことに等しい。(中略)つまり、清子幻想は、津田の内面、その『子供、子供』のナルシズムの投影であったことを悟る。(中略)津田はなすべきを知らなく茫然とする。性格の更生はそう簡単にはいかない。しかしただ一つ、お延を愛することの障害となっていた清子幻想だけは消える。予想の第二点は、『お延と清子とがおそらく対面するであろうという予想である。お延は吉川夫人に呼び出される。しかしここではお秀の前で演じた醜態は演じない。『老成』と『慢気』で完璧に武装して敵を撃退させる。吉川夫人の方がたけり狂って津田と清子の事実を話す。お延が温泉にのりこむ。清子との対決なしには、お延の性格は動きようもない。お延は清子と対峙して、自分の『慢気』の無力なのを知る。(中略)清子の『自然』さの勝利であり、お延の『意志の敗北である。しかし、お延は清子に見捨てられた津田を見て迷う。(中略)お延はこれを拾う」。

「津田の『技巧』お延の『老成』『慢気』が去って、『子供子供』と『第二の天性』が和合する」かくして、「東京をめざす汽車の中で津田は寡黙であった。何時もになく寡黙であった。寡黙な津田を曳いて汽車は走った。汽車と共に津田を曳いていくのはお延であった」と結末を推定するのである。

氏の推定は、漱石が若き日にシェークスピアを大学で講じたことから、シェークスピアの性格劇の構成を襲用したものとするのであるが、登場人物の固有の性格の内在の法則が、果たして必然的に事件をこのように導くものかどうかは、にわかに断定しがたい。

(3)¹² 荒正人氏は、結末を「(i) 津田が清子を媒体として新生を体験、吉川夫人も衝撃を受け、お延も自分の誇りを捨て、天然自然に従って新しく決意する場合。(ii) 津田が追いつめられて自殺する場合。(iii) 津田は一切の根本的解決を回避して、お延の前に清子の存在を隠せるだけかくし、また露見しても、何とかごまかしてしまい、『道草』の健三のように、一遍起こったことは何時までも続くであろうという信念で結びになる場合」などを列挙して「正直の所、(i)、(ii)、(iii)のうち、漱石はどれを選び出すのか。見当もつかぬ。結末の予定は余り強いものではなくて、中心人物たちを支配する内的法則によって解決がもたらされることになる」としている。

中心人物たちのもつ内的法則によって解決される、という考え方は荒氏に限らず多くの論者の主張するところで、それを無視した帰結などは論外であろう。問題は確たる論拠を挙げて結末を推定することにある。

荒氏の列挙する三つの場合は、173節の「彼には最初から三つの途があった。そうして三つよりほかに彼の途はなかった。第一はいつまでも煮えきらない代わりに、今の自由を失わないこと、第二は馬鹿になってもかまわないで進んで行くこと、第三すなわち彼の目ざすところは、馬鹿にならないで自分の満足のゆくような解決をうること」と対応して考えられるもので、(iii)は第一にそのまま、(ii)は第二の場合を、馬鹿になって進めば死あるのみ、と限定するものであり、(i)は、第三の場合のような通俗的満足はありえるはずがなく、天然自然に従って始めて安らぎを得ることができる、と考えての推定のように思われる。

既述したように、津田は死なないはずであるから、(ii)は考えられないし、「明暗」が思想上「道草」のくり返しとすれば、(iii)もあり得ないことではないが、全じく173節で、「馬鹿になってもかまわない、いや、馬鹿になるのはいやだ、そうだ馬鹿になるはずはない」と、第二と第三の間を往来し、「馬鹿になるはずがない」と「最後まで落ちた時、彼ははじめて立ち上がるのである」から、残るのは(i)すなわち第三だけとなる。

しかし、津田の期待するような第三の場合は、根本的治療を必要とする津田には望むこと不可能とすれば、一大切開手術によって、「穴と腸といっしょにしてしま」い、「天然自然割かれた両側が癒着して」くるのを待って「本式に癒る」ようになるよりほかに方法がない。筋の進行の大きな枠としてこれを承認するにやぶさかではないが、清子の媒体作用がどのような形で行なわれるものか、またお延がよき妻として復活するかどうか、これらのことについては、なお追求を必要とするところである。

Ⅲ 「明暗」本文からの条件

これまでの論述にも「明暗」本文からの条件は必要に応じて引用してきたが、主要人物の言動から、帰結の推定に有効なものを摘記すると、次のようなことが挙げられる。

1. 1節の2行目に「この前探った時は、途中に癒痕の隆起があったので、ついそこが行きどまりだとばかり思って、ああ言ったんですが、今日疎通をよくするために、そいつをがりがりかき落としてみると、まだ奥があるんです」とある。

唐木順三氏は、この癒痕の隆起の「背後に、『それから』の最後の代助、三千代とともに情炎の中へ突走る代助をこう診断したことにつらなるものがあったかもしれない」とし、「明暗」における再診の結果は、津田の内部に残っている病根をみつけた。代助の自然や天意は『途中の癒痕の隆起』であって、(中略)代助において『其所が行き留りだと思った』もの、宗助において細々と治ったもの、それをもう一度とりあげて、事実を事実として認めた上で、根本的な手術をやることになるのである」と解釈しているが、漱石の作品の発展系列からいえば、首肯せざるをえないことである。

同時に「明暗」だけについて見た場合、お延との結婚を癒痕の隆起と考えてもよいのではなかろうか。津田の心を「がりがりかき落としてみると、まだ奥があ」って、それは「腸まで続いている」すなわち、清子まで続いていて、「癒りっこない」かといえ、切開して穴と腸をいっしょにしてしまう」つまり清子と会ってそこにおこる「天然自然」の作用で本式に癒る、のが筋の基本とも考えられる。3節の「だけどいやだわ、あなた、もし切りそこないでもすると……」というお延は、一応の理由としては芝居に行けなくなることがあるにしても、実際は、現在のままの状態を望んでおり、同時に、温泉場における津田の精神の根本的治療の重大性を、お延を通じて作者が予告している、と解されないこともない。

2. 28節に小林が「現に君なんかよく病気をするのは、するだけの余裕があるからだよ」と言い、藤井が同意を示すが、お延という嫁をもちながら清子のことを思いつづける津田は、確かに心のぜいたく病にかかっていると考えられる。俗人みな然りであろう。しかし、余裕がない境遇になるだけで根本的治療が完成するわけではなく、一大転機が生ずるためには、例えば、求めてやまないものが金輪際手にはいらなくなる状態になる——清子が死ぬ——というようにすることが必要ではなかろうか、お延が死んだくらいでは、すまないとは思っても、津田の、いや人間の「業病」は根本的には治癒しない、のではなかろうか。167節に「小林に啓示されるよりも、事実そのものに戒飾されるほうがはるかにてき面で切実でいいだろう」とある。

3. 29節に小林が「医者の名が同じ小林なので……」と言うのは、心の病の方の主治医を友人の小林とするという寓意でもあろうか。とすると、彼の言動は帰結の推定にも大きな材料となる。

4. 42節「癒痕が固いんで出血の恐れがありますから、当分じっとしていて下さい」と小林

医師が言うのは、温泉場で急変を招致する伏線であるかもしれない。

115節の「まだ創口の方はそっとしておかないと危険ですから」そして、「少しゆるめてみたら血がにじみ出した」これも42節同様危険信号である。

153節「これが癒りそくなったらどうなるんでしょう」「また切るんです。そうして前よりも軽く穴が残るんです」「心細いですな」「なに十中八九は癒るにきまっています」「じゃ本当の意味で全癒というと、まだなかなかかかるんですね。」「早くて三週間おそくて四週間です」津田は「なまじい医者^い者に相談して転地を禁じられでもすると、かえって神経を悩ますだけ損だと打算し」て自分の矛盾を承知しながら、三週間たたないうちに粗忽にも不謹慎を断行するのである。

温泉場における大事件？によっても、津田は完全治療には至らず、なお手術を要するらしい。大塚楠緒子が漱石の至上の想い人で、彼女の死後も幻想が拭いきれなかった、と仮定して、清子の原型を考えてみることは無意味でなさそうである。事実、楠緒子が死んだ時、漱石は修善寺で大患中で、30分間“死んで”いたこともある。同日のことではないが、病臥中であるので、漱石は一種の以心伝心の“心中”と考えて（勿論漱石は生き残っている）それを主軸として筋をたてた、と想像してみるのも一つの考え方である。

漱石が長与病院から修善寺に転地療養したことも、後からいえば大きな粗忽であった。

Ⅳ 大正五年初夏頃の「断片」二の解読

1. 客路青山外行舟緑水前

客路^{かく}青山の外、行舟緑水の前。〔旅人の行く旅路は青山（骨を埋める処、人間の本来の生き方）の程遠くに今はあり、舟は行雲のように、清らかな緑色の水の上に漂っている。〕

津田を旅人（人間）の代表とすれば、彼は俗界を用意周到に生きて、派手に楽しく世を過ごそうとしている。しかし、清子に突然背を向けられたのを契機として、お延との心理的対立、お秀の無用の干渉、小林の辛辣な攻撃や心理暴露、吉川夫人の弄策などによって、暗い不可思議な力に導かれるままに、人間本来の在り方の覚醒に近づいてゆく。

2. 源水看花入幽林採蘭行

源水に花を看て入り、幽林に蘭を採りて行く。〔旅人は河の源の辺りでは美しい花を見まもって水中に入り、奥深い静かな林では、君子の花といわれる、芳香を放つ蘭を折り採ってゆく〕（源水は平地に出た泉）

津田は、不動の滝あたりで川に落ちる清子を見て、引かれるように自分も水中に入り、ひとり生き返った後は、幽林で道を求める君子即ち僧となって悟道に努める。（小林医師の言う「また切るんです」に対応する）

3. 月従山上落河入斗間横

月 山上より落ち、河 斗間に入りて横たわる。〔赤壁賦の、月出於東山之上、徘徊於斗牛之間の反対で、山上にあった月は今や落ちて四辺は暗くなり、河が北斗星と牽牛星の間を闇の中で距てるように横たわっている。〕

月のように明るい清子も今は亡く、ただあるものは、彼女の沈んだ河と、生き返って茫然と河辺にたたずむ津田の姿のみである。

4. 無心到处禅

無心到る処禅〔悟って心^{こころ}を無にすれば、いずこも禅定〕

津田は今や我心を無くして虚心となり、人間の根元である無の境地に至り、どこにいても何をしても、もはや心が乱れることはない。後に五文字が欠落しているようである。

5. 林下僧無事江清日復長

林下 僧無事、江清く日また長し。

幽林の中で、僧は本来なすべきことのほか別事なく、心悟れば、前のおり、河は清らかに流れ、春の日は遅々として暮れない。津田の悟境であろう。

6. 花生曉夢迷胡蝶望帝春心託杜鵑

花生は曉の夢に胡蝶に迷い、望帝は春心を杜鵑に託す。〔花生は花精か、莊周か、しばしまどろむ曉の夢に胡蝶を見て、自己と胡蝶との差別と同一に迷い、蜀王杜宇はその春を思う心から杜鵑と化した。万物は一体で、いたずらに差別の相に執着する要はないのに、琵琶記に監田日煖玉生烟、似望帝春心托杜鵑とある。〕

初めに戻って、津田は清子に迷っている。

7. 香消南国美人尽照入東風芳草多

香は南国に消えて美人尽き、照は東風に入って芳草多し。〔東京の南にある温泉場で、佳人を弔うために立てた線香の燃え尽きるとともに、その姿は永久に見ることができなくなったが、それを知らぬかのように、日光は春風と和して辺りは温かく、地上にはかぐわしい草が、たくさん生い茂っている。〕。ちなみに大塚楠緒子は大磯で病没した。

清子は死んだが、春の天地は日光も春風も草木も前のおりである。

8. 濃眊^{ボウ}覚来鶯^{けいざん}乱語驚殘好夢無尋処

濃眊^{ボウ}覚^{けいざん}来たりて鶯^{けいざん}乱語し、好夢を驚殘して尋ぬる処無し。〔眼精の明らかでない痴愚も、すっかり迷いが覚め、鶯たちはやかましくさえずりあっており、楚夢ならぬ好夢は、忽ちそこない破れて、あとかたもない。〕

津田の迷いは清子の死で覚醒し、周りの女性たちも目を覚まして話し合う。俗界の事は夢にすぎぬことがわかり、寂莫^{じやくまく}の真の世界が次第に現出してくる。かくして、津田とお延は身も心も離別するのである。

—以上試解—

V 一つの推定

1. 清子の微笑

『「奥さん」と言おうとして、言いそくなった彼はつい『清子さん』と呼びかけた。『あなたはいつごろまでおいでです』『予定なんかまるでないのよ。宅から電報が来れば、今日にでも帰らなくっちゃならないわ』津田は驚いた。『そんなものが来るんですか』『そりゃなんとも言えないわ』清子はこう言って微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に帰った。』

以上は言うまでもなく最終節の最後の部分であるが、津田一人に清子の微笑の意味の解明をまかせずに、作者の眼で考えてみたい。

津田は清子が既に入妻であることを意識下では忘れて、「清子さん」と、結婚以前に戻った心理で呼びかけている。しかし清子の方は、内も外もいっしょで、入妻であることをあらためて確認させるかのように「宅から電報が来れば今日にでも帰らなくっちゃならない」と言う。津田は驚かざるを得ない。清子は「そりゃなんとも言えないわ」と言って「微笑」するのである。

下女に案内されて清子の部屋を訪れた津田は、今までに3度彼女の微笑を見た。そうしてそれは、いずれも余裕のある微笑であった。最後の微笑も、彼女の「自然の成り行き」ならば万事それにまかすより仕方がない、という自己を客観視した余裕から来る微笑であろう。ただ、その電報なる呼び出し状が、関から来るのか、津田も清子も思いもかけない「自然の成り行き」からのものであるかは不明である。

津田は前夜、清子の存在も、自己自身も見失って旅館の廊下を夢中歩行者のように歩き回って、図らずも清子に遭遇した。それは無意識に導かれた行動でありながら、合目的でもあった。「清子のからだが硬くなるとともに顔の筋肉も硬くなった。そうして両方の頬と顔の色がみるみるうちに蒼白く変わって行った」のは、「津田がそこに望みを繫いだ」とおり、「材料不足のために容易にまとまらなかった」にしても、清子が津田にひそかに温めていた愛情の自覚と思われる。余りに突然なため、また今は人妻であるが故に、遂に彼女は蒼白になり、驚愕がやや醒めると、「くると後ろを向いた彼女は止まらなかった」のであろう。

津田も清子も、無意識になると、「暗い不可思議な力」で、心は勿論、行動まで惹かれ合っている。寝る前に入浴することにしてはいても、清子は津田からの自然の呼び声に応じ、廊下に姿を現わしたものと言ってよい。己を忘失し尽くしたときの人間の心と行動には、その本心がさらけ出されるとともに、「¹³霊の感応」も生ずるようである。(……漱石を貫ぬいて流れてゐる恋愛の神秘・心靈の感応の可能に対する信仰であった。)

一度捨て去った男が、年余を経て、しかも共に別々の結婚をしているのに、なお自分に慕い寄って来るのを憎む女性があろうか。悪病をうつされ、流産さえして病をひとり養う清子には、勝手に津田を捨てた罪障感が残っていてもおかしくはない。津田同様恐らくその夜よく眠られず、いつもより遅く越きた彼女は、翌朝もまだまごまごと、贈られた果物籠を両手でぶらさげたまま縁側の隅から姿を現わさねばならなかった。作者はそれを「今まで荷厄介にしているということ自身が、津田に対しての冷淡さを示す度盛りにはならないのは明らかである」と註している。要するに津田の出現は清子には嬉しいのである。

津田には技巧があって、意識下と意識とが一致することは比較的少ないが、「単純とより解釈できない清子」は本心のまますべてを言行に表わす。浜の客から、午後滝の方へ散歩に行くことを誘われて応諾した清子が、突然の津田の出現で動揺した本心の落ち着かないままに、何かしでかしそうである。そして清子の前に出ると「一顧の掛念さもなく」なる津田は、清子のしでかすことに惹かれて、それに同じ^{どう}そうである。

2. 床の間の寒菊

188節に「津田の疑問と清子の疑問が暫時視線の上で行きあったあと、最初に眼を引いたものは清子であった。津田はその退き方を見た。そうしてそこにも二人のあいだにある意気込みの相違を認めた。彼女はどこまでもせまらなかつた。どうしてもかまわないというふうに眼をよそへ持って行った彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落とした」とある。

清子の疑問は、「私吉川の奥さんにお見舞を頂こうとは思わなかつたのよ。それからその見舞をまたあなたが持ってきてくださろうとは思わなかつたのよ」というのであるが、背信の対象である人たちから、このような好意が示されるはずもなく、また事は余りに唐突すぎる。「はっきりした答えを津田から待ち受ける眼をした」のは当然であろう。と同時に、津田の出現が自分に対する愛情によるものか、何か思わくが^{どう}あつてのうえのことかも知りたいところであろう。

津田の疑問は、今再び見た清子の「信と平和」の輝きの美しい眼が、「もう私を失望させる

美しさにすぎなくなったの」かどうかをはっきり教えてほしいのである。

「自然の成り行き」をもたらす原動力である「暗い不可思議な力」にひっぱたかれた「やせ馬」の津田は、「運命の宿火」に導かれて、いつの間にか「馬鹿になってもかまわないで進んで行っ」て、次第に東京の日常世界を忘却し、南国に在る美人清子に懸命に求愛している。

しかし清子は自分の「自然の成り行き」を「寒菊の花」と観じていた。時既に遅い寒菊である。「どうでもかまわない」と、既成の「事実」から今後起こるであろう「自然の成り行き」に強い関心をもとうとはしない。

¹⁴「あれは俺の理想の美人だよ」と妻の鏡子にまで話した大塚楠緒子が亡くなったとき、漱石は「ある程の菊抛げ入れよ棺の中」の句で弔った。清子は津田を迎えるに際して床の間に寒菊を活けた。津田は知らないが、漱石は菊が最愛の人を弔う花であることを十分承知している。寒菊を活けた清子は無意識裡に自己の運命と津田への回答をここに現示していると推定できないことはない。

3. 四つの金盥^{だらう}の水の渦

「廊下はすぐ尽きた。そこから二、三段上がるとまた洗面所があった。きらきらする白い金盥が四つほど並んでいる中へ、ニッケルの栓の口から流れる山水だか清水だか、絶えずざあざあ落ちるので、金盥は四つが四つともいっぱいになっているばかりか、縁をあふれる水晶のような薄い水の幕のきれいに滑って行くさまがざあやかに眺められた。金盥の中の水はあとから押されるのと、上から打たれるのとの両方で、静かなうちに微細な震盪を感じるもののごとくに揺れた。(中略)大きくなったり小さくなったりする不定な渦が、妙に彼を刺激した」(175節)

津田を妙に刺激した「不定な渦」とは何なのであろうか。

ニッケルの栓の口から縦に流れる水は、滝の象徴のように思われる。金盥が四つということが三度書かれているが、四＝死で、死への誘いかもしれない。そうして津田は、他のすべての存在を忘却し、「ただ彼の眼の前にある水だけが動」いて「渦らしい形を描」き、「その渦は伸びたり縮んだり」する状景が、津田に「風呂で濡らしたばかりの色が漆のように光」り、「なぜかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされたあとの庭先らしく思」わせる。これは、彼が水に飛びこみ生き返る筋の暗示ではなかろうか。「これは自分の幽霊だという気がまず彼を襲」い、「すごくなった彼には抵抗力があった」とは、水泳のできる彼はおのずから生きかえらざるをえない、ことを示すようである。「鏡の前にある櫛を取り上げ」「それからわざと落ち着いてきれいに自分の髪を分け」て、「生」の世界に立ち戻る。

4. 階^{はしご}子段

175節には続いて「彼は洗面所と向かい合わせにつけられた階子段を見上げた。そうして階子段には一種の特徴のあることを発見した。第一に、それは普通のものより巾が約三分の一ほど広がった。第二に象が乗っても音がしまいと思われ^{ニス}るくらい巖丈にできていた。第三に尋常のものと違って、まがいの西洋館らしく、一面に仮漆^{ニス}が塗っていた」とある。

階下の津田と、やがて階上に姿を現わす清子ととは、第一に普通の人より $1/3$ ほど広い階段でつながっている。(とは、表面的な解釈かも知れず、数字に独特の趣向を示す漱石は、 $1 + 1/3 = 4/3$ 、分子の4＝死で、階上の清子は死に、3＝惨産で、階下の津田は惨めな思いをしたあと更生する暗示か) 第二に、二人の心の結びつきを表わす階子段は、女の髪につながる象でもある津田が乗っても大丈夫なほど強い。しかし第三に、西洋かぶれしている仮漆^{ニス}の

かか
塗った津田には、それが見えない。仮でなくほんとうの漆が表われるには、風呂ならぬ暴風雨で洗われなければならないのである。

しかし津田は、「そこを上っても自分の室へは帰れないと気がつく」人間で、自分の室（生
の世界）へ帰るより仕方がない人間であり、「階上の板の間まで来てそこでびたりと止まった
時の彼女は、津田にとって一種の絵であり、彼に「忘れることのできない印象の一つとし
て、それをのちのちまで」伝えられることになる「成り行き」の女であった。

5. 一つの推定

以上の論述を要約すると、その日の午後、浜の夫婦とともに滝（不動の滝）の方へ散歩に行
く清子は、何かのきっかけで滝に落ち、津田が思わずその後を追ひ、構想かとも思われる「断
片」の和文や漢文にあるとおり、清子はそこで死に、津田は助かり、僧になって悟境への道を
たどるのではなかろうか。また、お延は岡本の家に戻る、と推定するのである。

参 考 文 献

1. 村上嘉隆：夏目漱石論考，p. 352～353，啓隆閣（1973）
2. 江藤 淳：漱石とその時代第二部，p. 280，新潮選書（1970）
3. 唐木順三：明暗論（夏目漱石全集別巻），p. 222，筑摩書房（1973）
4. 猪野謙二：「明暗」における漱石（明治の作家），p. 166，岩波書店（1966）
5. 滝沢克己：夏目漱石，三笠書房（1943）
6. 中村草田男：明暗下，p. 313，新潮社（1969）
7. 小坂 晋：漱石の愛と文学，p. 246，講談社（1974）
8. 江藤 淳：夏目漱石，p. 170，講談社文庫（1971）
9. 小島信夫：夏目漱石全集13，p. 467～469，角川書店（1974）
10. 桶谷秀昭：夏目漱石論，p. 284～285，河出書房新社（1972）
11. 村上嘉隆：夏目漱石論考，p. 347～349，啓隆閣（1973）
12. 荒 正人：夏目漱石全集9，p. 767～768，集英社（1972）
13. 小宮豊隆：漱石の芸術，p. 48，岩波書店（1972）
14. 夏目鏡子：漱石の思い出，p. 46，角川書店（1966）